

Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter

No. 20

December 31, 2003



BCJA 英国留学奨学金 2003年度報告

BCJA 英国留学奨学金審査委員会委員長
白鳥 令

BCJA 英国留学奨学金制度を創設してから、3年が経過しました。今年度も、10名の方々に英国で研究あるいは勉学のために自由に使っていただくかたちで奨学金を差し上げることが出来ました。各方面のご助力ご厚意に感謝致します。

以下は、本年度応募者全員にお送りしましたお礼と報告の手紙です。

2003年(平成15年)9月20日

BCJA 英国留学奨学金
応募者の皆様

BCJA 会長 橋都 浩平

BCJA 英国留学奨学金審査委員会委員長 白鳥 令

拝啓

初秋の候、貴下ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。この度は、私共かつて British Council の関係で英国に留学をした者達が創設致しました BCJA 英国留学奨学金にご応募いただき、厚くお礼申し上げます。

お一人当り英国留学のための旅費相当奨学金(15万円)というわずかな金額の奨学金であるにもかかわらず、本年度も115名という多数の応募者があり、しかもそれぞれが高度な学力と知識、意欲的な計画の持ち主でありまして、審査委員会は非常に困難な選択を迫られました。

公正な審査の結果、添付別紙の通り、2003年度は10名の方々に BCJA 奨学金を差し上げることになりましたので、お知らせ申し上げます。

なお、選考に当りましては、英国留学で学ぼうとされている具体的な目標や計画が明確か、また、英語力も含め、英国での研究や勉学の準備は出来ているか、の2点を重視して審査致しましたことを付記致します。

何分にも英国留学の経験を持つ個人の善意の寄付に財源を依存している BCJA 奨学金であり、十分な援助をすることが出来ませんが、今後も毎年この奨学金の募集を続けることを考えてお

りますので、どうかよろしくご支援の程お願い申し上げます。

なお、ご参考までに BCJA 英国留学奨学金の規程を同封致しますので、ご覧下さい。

敬具

2003年度奨学金授与者リスト

氏名	所属/ 出身大学	留学先研究機関	研究分野
Obara Hiromi	弘前大学(自 治医科大学)	London Sch of Hygiene and Tropical Medicine	Medical science
Fujisaki Mari	一橋大学	LSE	International relations
Ishii Kayoko	慶應義塾大学	LSE	Social policy
Katayama Aya	慶應義塾大学	LSE	Gender and population studies
Matsubara Megumi	東京大学	Univ College, London	Architecture
Hosoda Takamichi	東京大学	Cardiff	Management science
Totsuka Natsuko	名古屋大学 (MIT)	Loughborough University	Water and waste engineering
Kashima Yohei	埼玉大学(北 海道大学)	Sussex	Mathematics
Liu Lushan	筑波大学	Bristol	Film and television
Aoki Ryoko	東京藝術大学	SOAS	Noh theater / Women and theater

2002年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[1]

スコットランドで学んだ

「環境史: Environmental History」と「Canoe Polo」

柳田 隆文

BCJAのご先輩の皆様には、St Andrews 大学への留学に際しまして、ご厚意を賜り心からお礼を申し上げます。また先日は、Annual Reception にお招きいただき、様々な分野でご活躍の皆様から大いに刺激を受けました。留学のみならず、重ねてこのような機会を与えていただき、お礼を申し上げます。以下にこの度の留学行についてご報告申し上げ、取り敢えず、ご厚意に対する些かのお礼といたします。

* * * * *

1. St Andrews 大学: 環境史コースにて

さて、BCJA の諸兄の皆様には、環境史 (Environmental History) という学問領域につきましては、ご案内のことと存じます。これは人間と自然環境の関係、またその変化・変遷を歴史学および環境諸科学の手法を用いて分析する学問領域です。ヨーロッパでは1999年に学会が設立されたばかりで、現在、成長期にある分野です。私は環境史家になることを志し、2002年の時点でヨーロッパでは唯一の環境史コースを有する St Andrews 大学にて学んでまいりました。St Andrews 大学の The Institute for Environmental History は、1992年に Professor T. C. Smout によって設立され、現在は Dr John Clark が Director を務められています。

この Institute の環境史・環境政策 taught course では「環境史とは何か」を中心に、「環境思想史」「ランドスケープ論」及び「環境考古学」等々、実際の環境史研究を行ううえでの主要なアプローチ、ツールをも学ぶことができました。日本では独学で追い求めるしかなかったものを体系的に学ぶことができ大変有意義なコースでした。一つ意外だったのは、同期の生徒が私以外はみな北米人であったことで、教授の Dr Clark もカナダ人でした。そのため、スコットランドを代表する最古の大学であるのに、学校ではアメリカ英語で過ごすことになりました。もちろん学部生と合同の授業やクラブ活動そして学生寮では、イギリス人の生徒が大半でしたが。

2. スコットランド最初の国立公園の誕生

2002 - 2003 年という期間にスコットランドに滞在できたことは、環境史を学ぶ私にとって非常に幸運でした。私がスコットランドへと出発する直前の2002年7月に、スコットランドにおける最初の国立公園である「The Loch Lomond and the Trossachs National Park」が誕生したのです。そして私の滞在中の1年間は、スコットランドで2つ目となる予定の「The Cairngorms National Park」の領域をどこまでとするかについて盛んに論争が行われていました。これは、人間と自然との多面的な関係のバランスをどうとるかという問題を問うものでした。そして、どのような立場の人であれ、「この地域の環境がどのように育まれてきたか」という環境史の把握は、その主張の根底になければならない状況でした。この論争から、正に現実の問題として環境史研究の意義を理解することになりました。このことは、環境史という学問に取り組むために、実に良い刺激となりました。

このような国立公園設置の動きの中で、私が学んだコースでも、授業の一環として実際に Cairngorm 地域を訪れました。公園領域に組み込むかどうか議論されている区域の農場を訪ね、そして(非常に寒かったのですが)林業の現場や自然保護区なども回ることで、人々の長い営みと現在の環境とのつながりを実感することができました。また Scottish Woodland History Discussion Group のミーティングに参加するなど、現地の研究者達の熱のこもった議論に触れることもできました。このように私のスコットランドへの留学は予想した以上に充実した環境とタイミングに恵まれました。

余談となりますが、スコットランドは2002年7月に最初の国立公園が誕生するまでは、国立公園をまったくもたない、世界でも数少ない「nation」の一つでした。世界の国立公園制度の父とされる John Muir の出身地であり、すでに1920年代には国立公園を求める運動が始まっていたことを考えると、それは大きな皮肉でした。その原因は、スコットランドにおける諸産業(狩猟、Deer stalking・Grouse shooting、農業、林業、ウイスキー製造等)が、自然環境保護や観光産業と対立する要素を多くもっていたことにあります。しかし、この地の環境史を紐解いてみると、諸産業もまた、スコットランドの景観を育んできた側面もあることに気づきます。

国立公園設置のねらいはこのような様々な要素を統合的に調整することによって、自然環境、諸産業ともにサステナブルに維持・育成していくことにあります。97年のブレア政権の誕生を直接的かつ最大の契機として2002年7月にスコットランド最初の国立公園が誕生しました。私の帰国直後の2003年9月には、イングランドやウェールズ、北アイルランドを含めた連合王国にある全ての国立公園の中でも最大の面積を持つ「The Cairngorms National Park」が誕生するにいたりました。

3. アカデミック・ファミリー

さて話は変わるのですが、St Andrews 大学にはアカデミック・ファミリーという学生同士の擬似家族を作る伝統があります。アカデミック・ファザーやマザーが、アカデミック・チルドレン達の大学での良き両親となるのです。私の場合は、私の住んでいた寮のすぐ前が East Sands というきれいな浜辺だったことから門を叩いた St Andrews 大学カヌークラブのキャプテンがアカデミック・ファザーとなってくれました。それによって自動的にアカデミック・ブラザーやシスターもでき、色々なアドバイスをもらえるだけでなく、食事会やパーティなどをして楽しい時間をたくさん持つことができました。



Canoe Polo 試合開始! at Glasgow Univ

「ロンドンでの1年を終えて」

田崎 恵子

4. St Andrews 大学カヌークラブと「Canoe Polo」

皆さまは“カヌー”と“カヤック”の違いをご存知でしょうか。イギリス人はこの二つの言葉を混同して使っているとは、カヌーの本場、カナダ出身の教授 Dr Clark の言です。St Andrews 大学カヌークラブでも、実際の活動では一人乗りで胴のまわりも密閉するカヤックに乗ります。そのカヤックを連ねて、St Andrews を囲む北海に漕ぎ出し、波に乗り、また、大きな Tay 川を下ったり、激しい溪流に挑戦したりと、水上からスコットランドの自然と関わったことは忘れられない思い出です。

また、カヌークラブでは、カヤックに乗り2チームがプールの両端のゴールにボールを入れあうカヌーポロという競技にも取り組んでいます。体当たりも、ボールを持っている相手を水の中へとひっくり返すことも許されるかなり激しいスポーツですが、やはり、艇の操作テクニックが何より物を言います。私も2学期には St Andrews 大学 B チームのメンバーとして、スコットランド大学対抗チャンピオンシップ等に出場し、他大学と何度も対戦したので、いつしか日本の母校以上に、St Andrews を誇りに思うようになっていました。

カヌークラブでの一年間を通してイギリスの学生の様々な特徴も知ることができました。ふざけあっているときやパブで話す内容、気が合わない同士がけんかになるなど、日本の学生と同じだなあと思うときも多かったのですが、キルトやドレスで正装して Ball に参加するときなどは立派に大人らしく振舞うこともでき感心してしまいます。特に、クラブの Annual General Meeting でいろいろな役員を決める際には、公平さに実に厳しく気を配り、上級生の意見が第一というわけではなく、皆で意見を出しあって、様々な角度からしっかり議論するところなど、民主主義の伝統がこのようなどころにもしっかりと浸透しているのだなと改めて感心しました。



カヌー旅行での一風景 at Glen Etive

* * * * *

まだまだご報告したいことがたくさんあり、1年に満たない短い間で、これほどたくさんのごことを学び、経験し、考えることができたことに今驚いています。これからは、この経験を土台に研究者としても人間としても自分を高め、社会に貢献していきたいと思っています。帰国後、日本でも環境史学会を設立しようとする動きがあること知りました。St Andrews で学んだことを生かし、日本でのこの分野の発展とヨーロッパ、アメリカ、アジアの環境史学会との連携のお手伝いを是非させていただきたいと考えています。末筆ながら BCJA の一層のご発展と先輩の皆様の益々のご活躍を心からお祈り申し上げます。

(2002 年度 BCJA 奨学生, University of St Andrews, 環境政策)

2002 年 8 月から約 1 年間、University College London (UCL) の School of Slavonic and East European Studies (SSEES) に、MA 取得のため留学しました。学校の名前を見てわかるとおり、私が専攻するのは中東欧研究という、日本では馴染みの薄い分野です。日本では、資料、文献などの研究環境面に限界があると感じていたこと、だからと言って研究対象の国に留学するのは時期尚早だと考えたこと、かねてからいつか留学を試みたいと希望していたことに加え、個人の研究テーマだけにとらわれない、より広い意味での研究の土台を養いたいと思っていたこと。こうした様々な動機を検討した後に選んだのが、イギリスという国、そして SSEES という学校でした。

留学のスタートは、UCL 付属の語学学校で受けた 5 週間の夏期英語講座でした。これはマスターコースで学ぶ上で必要とされる様々なスキルを学生に身につけさせることを目的とした講習で、毎日の授業はもちろんのこと、それを補うための宿題やチュートリアル、加えて講習の最後に行われる試験やエッセイの準備など、非常に多くのことを求められました。それをこなすことはとてもハードで、期間中は常にプレッシャーがかかっている状態でしたが、結果的には大変実りの多いものになりました。特に、何も知らずにイギリスに来た私にとって、アカデミックな論文の書き方を教わったことは非常に重要なことだったと思っています。論文にふさわしい言葉や言い回しから構成の仕方、注の付け方や参考文献の書き方などの具体的なスキルを得られたことと並んで、日本ではそれほど意識する必要の無かったことに対してイギリスでは細心の注意を払わなければならず、それが論文を論文として認めてもらうための最低条件であるということに認識させられたことで、私は 9 月の本格的なコース開始に向けて心構えができたのです。この夏期講座は、私の留学のすべての基盤になったと言っても過言ではありません。

実際、8 月の英語学校を受けて自分の中である程度の覚悟が出来たからこそ、私はその後の SSEES での 1 年間を乗り切れたのではないかと思います。始まってみれば SSEES での授業をこなすことは、夏期講座などは楽園だったと思えるほどハードなものでした。私の受講した授業はすべて少人数のセミナー形式で、学生は毎回一つのテーマについて書かれないくつもの文献を読み、それに基づいて議論することが求められました。発表もたいてい週に一度は回ってきます。ただ単に論文に書かれている英語の意味を理解するだけでは不十分で、読みこなし噛み砕いて自分の考えをまとめて初めて準備が出来たと言えるわけなので、それには相当の時間と労力を必要としました。ただ、そうしてのぞんだ授業では、クラスメイトや教師との間で様々な意見が取り交わされ、その中で自分の知識や考えを修正したり新しい観点を発見したりすることが出来たので、得るものは非常に大きかったと思います。そこが、個人の研究に重さが置かれ、他の学生と共通のベースに基づいて議論することの少なかった私のそれまでの日本での大学院生活との、最大の相違点であり、私がこの留学に

求めていたものでもありました。当然、私は語学が最大のネックとなって、授業の理解力や議論の遂行能力など、多くの不十分な点を抱えていました。情けない思いをしたことは何度もありましたが、それでも、イギリス人始め各国から集まった、様々なバックグラウンドを持ったクラスメイトたちとの間の議論に幾度も刺激された学校生活にはおおむね満足し、日々充実していたことは間違いありません。1年の後半は試験と論文があわただしく続き、これらも授業と同様に、こなすのに苦労しました。しかしそれも、わけもわからず必死でやっているうちに、いつの間にか乗り切っていたという印象です。一年の終わりに留学の集大成として書いた論文には、それなりに満足しています。内容が、というよりは、執筆する過程で考えたありとあらゆることが、きっとこれからの自分の研究の基礎になるだろうと確信しているからです。

実は私はBCJAには非常に勇気付けられました。と言うのも、9月、ロンドンでBCJAから奨学金をいただけるという知らせをメールで受けたその日の朝、私は滞在していた寮の部屋に空き巣が入り、日本から持ってきたパソコンが盗難に遭っていたのです。自分の不注意で起こったこととは言え、私はとてもショックを受け、もう落ち込むしかない状態でした。そんな暗い心を引き上げてくれたのが、選考に通ったという日本からの思いがけない知らせだったわけです。もう一つは、BCJAが、私のようなマイナーな研究分野に携わる者を評価し、支援して下さったという点です。他の多くの皆さんのように、実学でも、また日本で盛んに行われているわけでもない分野である中東欧研究を専攻する私を選んでいただいた、ということで、私はそれからの留学生活に少なからぬ自信を持ってのぞむことが出来たような気がしています。現在、私は帰国し、東京の大学院に戻って勉強を再開させています。今のところ、将来再びイギリスで研究するかどうかは未定ですが、いずれにしろ、この1年間のすべての経験は、私にとってかけがえのないものです。今後自分がどこで何をするにしても、ロンドンで得たものが何らかの形で私の人生を方向付け、指針となってくれるだろうと思っています。ロンドンでの1年は私にとって、本当に重要な人生の節目、そして何かあればここに立ち返ろう、と思えるような、すべての基盤となりました。

(2002年度BCJA奨学生、University College London、中東欧研究)

2002年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[3]

オックスフォードを駆けぬけて

ダベンポート・アンジェラ・キクエ

わたくしが憧れの地オックスフォードで英文学の大学院生としての生活をスタートさせてから早くも一年以上が過ぎようとしています。まさに光陰矢のごとしの一年間でしたが、修士号取得という目標を達成するのみならず数々の経験を積むことができ、言語や文化の違いによる苦労もありましたが、最高の1年となりました。

わたくしは、もともと女子のみのカレッジであったセント・アン

ズ・カレッジと、そして英文学科に所属しています。オックスフォード大学はおよそ40のカレッジから成り立っているのですが、すべての学生は生活の基盤となるカレッジと、それから学業の中心となる学部両方に所属することになります。学生のほとんどは、所属するカレッジの寮に住み、カレッジの提供する食堂や図書館、コモンスルーム(JCR・MCR)、コンピュータ室などの施設を利用することになります。また、入学式や卒業式といった行事はカレッジ単位での参加となり、フォーマルディナーといってガウンを着用する正式な夕食会なども、カレッジの食堂で行われることになります。カレッジには勿論同じ専門分野の学生もいますが様々な分野の学生が混在しており、異なる分野の知識を分かちあうことができる貴重な場となっているようです(実際にわたくしの寮の隣人たちも、医学部生、エンジニア、教育実習生、そして数学者でした)。

わたくしの所属しているセント・アンズ・カレッジは1952年にオックスフォード大学のカレッジとして認定された非常に新しいカレッジの一つなのですが、女子の教育機関としては1878年までその歴史を辿ることができ、図書館もカレッジの図書館としてはもっとも大きく10万冊以上の所蔵を誇っています。実はこの所蔵数の多さに関しては面白い逸話があります。かつて女子学生たちはオックスフォードの大学図書館(ボドリアン・ライブラリー)へ立ち入ることができなかつたため、カレッジの図書館に本を揃えざるを得なかつたというのです。現在はセント・アンズも共学のカレッジですが、かつての「差別」の「恩恵」をこのような形で受けているのは何とも皮肉な話と言えるかもしれません。

セント・アンズ・カレッジは学生の数も学部生、大学院生の総数としては最も多いようですが、歴史的にも新しいカレッジであるためか、カジュアルでリラックスした雰囲気、親しみやすいカレッジといえるでしょう。いわゆるオックスフォードの由緒正しいカレッジ(11世紀から16世紀頃までに設立されたカレッジ)では、フォーマルディナーが毎晩あり、学生は夕食の時間に正装して着席しなければならないなどといった伝統がまだまだ続いているようですが、セント・アンズでは正装するディナーは2週間に1回程度です。天井の高いガラス張りのモダンな食堂は、セント・アンズならではのおしゃれな雰囲気を作り出しているようです。ところで、学部生の場合はチュートリアルなどの個人指導も自分の所属するカレッジで行われているようで、カレッジそのものが大学生活の中心となっているようですが、大学院生の場合は事情が違い、所属するカレッジとは異なるカレッジの教授に指導を受けるのが一般的なようです。わたくしの場合は指導教官がマートンカレッジの教授であることから、皇太子さまの過ごされた由緒正しいカレッジに一学期に数回は赴いて指導を受けています。1回の指導は40分程度ですが、1対1のきめ細かな指導に、いつも身が引き締まる思いがいたします。

ところで、わたくしの住んでいるカレッジの寮は1997年築ということもあって暖房設備も整っており、またセキュリティの面でもドアなどが暗号化されていて快適にまた安心して生活することができます。約80人の大学院生が15のフラットに別れて暮らしているのですが、1つのフラットには5人から7人の学生が住み、キッチンとバス・トイレを共有しています。そのほかテレビを見られるコモンスルームと洗濯場があり、ゲームズルームにはオックスフォードの伝統にならって(?)ビリヤード台と卓球台が設置されています。ここには共有のコンピュータとプリンタも設置されてい

て、自分のコンピュータやプリンタに問題が生じたときには本当に助かります。

寮に住んでいて何よりも恵まれていると思うことは、スカウトと呼ばれるお掃除婦さんが毎日共有スペースを掃除してくれること、さらには週に1回部屋の掃除をしてもらえることです。お掃除婦さんとはいえ毎日顔をあわせて楽しく話すことも多く、英国の母と呼べるような存在で、異国の地においてこれほど心強いことはありません。またインターネットの環境も非常に整っていて、自分の部屋でコンピュータをプラグインするだけでオックスフォード全体のネットワークにつながり、内部者のみに閲覧が限られているオンラインの資料なども全て自分の部屋で検索・閲覧することができるのです。とにもかくにもオックスフォードではこのように、学生が学問に集中できるような環境を生活レベルから提供しているといえますし、それを誇りにしているといえるでしょう。

ここまではおもにカレッジライフについて書かせていただきましたが、今度はわたくしの所属した英文学科とそのコースについての説明をさせていただきたいと思います。先ほども書きましたように、個人指導は指導教官と一対一で(指導教官のカレッジの研究室で)行われるのですが、講義やゼミは全て学部の建物で行われます。専属の図書館には英文学関係の書物が9万6000冊、雑誌が200種類所蔵されていて、資料収集はこの専門の図書館(開架)か大学図書館のボドリアン・ライブラリー(閉架)を使用しています。また、学部には大学院生用のコモンルームやコンピュータールームも設置され、学生に学問追及のための最高の環境を提供してくれているといえます。

わたくしは東京大学で既に修士号を取得していたのですが、学部時代に留学経験が1年あったことからさまざまな奨学金への応募資格がなく、金銭的な側面からも考慮して1年集中の修士のコースを選択することにいたしました。オックスフォードは三学期制度で一学期は8週間と短いのですが、各学期ごとにさまざまな課題が与えられ、各学期の8週間はあっという間に過ぎていきました。

第1学期のミケルマス・タームには毎日2コマ授業があり、学部生に戻ったような忙しさでした。授業は「テキストとは何か」という問題を議論する文献書誌学の授業、これに関連して英国における印刷や出版の歴史を各時代ごとに詳細に考察する授業、その他自分の専門分野である英国ルネッサンス演劇関連の授業が主でした。ルネッサンス演劇の授業に関していうと、プロレゴメナと言う概要の授業が週に2回ありました。概要とは言ってもその分野に造詣の深い専門家たちが毎回テーマを決めて(教育、絵画、音楽、魔術、外交、女性像など)1時間の講義をしてくださり、大変興味深かったのみならず、何に焦点をおいて研究を進めていくべきなのか、参考文献の甲乙の判断など、これから研究を進めていく上でも非常に重要なことを学ぶことができました。また、英国近代演劇に関するセミナーが2週間に1回開催され、英国内外から招かれた研究者たちの最新の研究発表に触れることができたのも幸いでした。さらに、16世紀のハンドライティングを習うという実践の授業もありました。当時の手書の文書を読み解くために、この分野で第一人者といわれる教授の指導のもとに、まず16世紀のアルファベットから1文字1文字習得していききました。当時はスプリングも確立されていなかったこともあり、既に知っている単語でも全く異なる綴りがかかっていることもあり、短い文章を読むのにもはじめのうちは相当時間がかかって

いました。しかし、1学期の終わり頃には、ヘンリー8世がクリストファー・モアに宛てた文書や、Cordell Aunelley といった女性の書簡、George Chapman の嘆願書などなどをすらすらとまではいかなくともそれなりに読解することができるようになりました。この授業に関しては筆記試験もあり無事に合格いたしました。なによりも「手に職をつけた」というか、これからの研究において(特に一次資料を読む上で)、この授業で得た知識が必ずや役に立つと思いますし、何よりの収穫であったといえるでしょう。第2学期のヒラリー・タームに入ると授業は半数に減り、課題の発表と論文にひたすら取り組むこととなりますが、わたくしは印刷技術を実践的に学ぶ授業も選択していました。この授業ではボドリアン・ライブラリーの地下3階に所蔵されている17世紀の印刷機や道具を使用して、実際に植字工がしていたようにアルファベットの活字を一字一字拾って特殊なスティックに並べていき、試し刷りと校訂を繰り返し自分のテキストを完成させていきました。このような実践的な経験をすることで、植字工の作業がいかに繊細であり、また如何に間違いと隣り合わせであったのかということも手にとるようにわかりましたし、活字になっているシェイクスピアのテキストなどを見ながら、「あ、これは植字工のミスだ」といった、単純そうであるが実際に経験をしていないと気が付かないようなことが手に取るようにわかるようになったことも何よりの収穫であったといえると思います。

ヒラリー・タームの最も重要な課題は書誌学に関する発表をすること、それを基にした論文を書くことでしたが、わたくしは、Reexamining Ralph Crane's Characteristics in Shakespeare's First Folio Text of Five Comedies というタイトルのもと、ラルフ・クレーンという代書人の特徴についての分析をいたしました。クレーンという人物に関してはあまり知られていませんが、もともと公証人だった彼の筆記体が流れるように美しかったことから、ミドルトンやフレッチャーといった劇作家達にも好まれ、特に貴族などに劇作品が献呈される場合には代書を頼まれていたようです。彼の肉筆の原稿はそれほどたくさん残っていませんが、そのスペルや句読点の特徴からシェイクスピアのファースト・フォリオ(1623年に出版された最初の全集)に収録されている少なくとも5つの喜劇が、彼の手書き原稿を元にしていないのではないかといわれており、その特徴がいかなるものか、植字工の特徴などとも比較して分析を進めていきました。クレーンの特徴を考察するにあたっては、ボドリアン・ライブラリーが所蔵しているクレーンの現存する手書の資料(16世紀)を実際に手に取りながら(素手で触れながら)研究を進めるという大変贅沢な経験をさせてもらいました。

第3学期のトリニティー・タームには、自分の専門分野の選んだトピックで、修士論文にあたるものを書き上げました。わたくしは、東大在学中からシェイクスピアにおける売春のテーマを扱って研究を進めているのですが、オックスフォードでは「尺には尺を」と「終わりよければすべてよし」という二つの問題劇における女性像に関して、売春のテーマと関連付けて考察いたしました。これに関しても、指導教官のきめ細かな指導により、また豊富な資料とネット環境の素晴らしさに助けられて、納得のいくものがかけたように思います。

このように日々学業に追われる非常に忙しい1年間ではありましたが、日本と英国の掛け橋として活動できる場も探しては参加するように心がけていました。時間があればジャパン・ソサエテ

イーの会合などにも出向いていましたし、また、オックスフォードで日本語を専攻する学生達に週に1回日本語を教えていました。また、地域の中学校でジャパンデーが開催されたときには折り紙講師として地元の中学生に折り紙を教えるという楽しい経験もできました。

最後になりましたが、わたくしは既に1年間の留学経験があったため他の日本の奨学金への応募資格がほとんどなく、つらい思いもしていたのですが、BCJA から奨学金をいただいたことは大変大きな励みとなりました。心から感謝しております。オックスフォードにおける研究環境があまりにも整っていることから、日本への帰国を延長し、現在こちらに留まって研究を続けておりますが、これからもBCJA奨学生として恥じないよう学業に勤しんで参りたいと思っております。ありがとうございました。(2002年度BCJA奨学生、Oxford University、英文学)

2002年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[4]

多くの知識や人との出会いに満ちた一年

戸田 陽一郎

サセックス大学に留学した一年間は、私にとって知的好奇心を大きく掻くような新たな知識や、多くの人との出会いに満ち溢れたものでした。

学業面においては、留学前は途上国開発に携わるコンサルタント会社勤務であった私にとって、サセックス大学で村落開発を学ぶことは以前からの憧れでした。というのも、今や途上国開発アプローチの主流となっている「参加型開発」の大家であるロバート・チェンバースをはじめとして、開発学で著名な教授陣がサセックスにおり、またコース・プログラムが理論と実践の両方を重んじていたという二点が非常に魅力的だったためです。

授業においては農村における社会経済の変化や、人口増加と環境破壊の因果関係等の理論に関するセミナーとともに、実践的なテーマを取り上げたワークショップも行われました。英国国際援助庁が採用している「持続しうる生計(sustainable livelihoods)アプローチ」や「ロジカル・フレーム」といった開発手法を用いて、サセックス大学のあるブライトンにおける交通渋滞の状況を分析し、その緩和策を検討した経験は、交通問題に限らず途上国の諸問題の改善策を検討する上で、非常に有益なものでした。また、環境NGO(Non-governmental Organisation)設立を実習したワークショップでは、NGO活動資金を得るための活動案ならびに資金提供候補者に活動内容を訴えるポスター作りを実習しました。このワークショップは実現可能でかつ地域住民の生活水準を向上させる活動を策定し、それを明確かつ簡潔に他人に伝えるということの難しさを知ったときでもありました。

またサセックスはとても留学生の多い大学で、世界各地から集まった学生と出会う機会がありました。私のコースも3分の2は留学生で、出身国はカナダ、ペルー、セネガル、ガーナ、南アフリカと多彩でした。私が一番仲の良かった友人も南アフリカ出身でしたが、彼のバックグラウンドは少し変わっていて、祖父の代に隣国のモザンビークから移住したということで、同じ部族の人は南アフリカよりも、むしろモザンビークに多いということでした。

た。そういった事情もあってか、彼からはモザンビーク内戦により発生した南アフリカ在住のモザンビーク難民の話や南アフリカとモザンビーク両国に広がるクルーガー国立公園内で野生動物の保護と自分たちの生計とを両立させながら生活する人々の話について詳しく、私も興味深く彼の話聞いたことがありました。

また、私がボランティアをしていた国際NGOオクスファムのショップでも、いろんな人との出会いがありました。語学学校が多いとされるブライトンという土地柄のせいも、ボランティアの国籍も、フランス、イタリア、香港、インド、スリ・ランカなど多岐にわたっていました。中でもカレッジに通っていたスリ・ランカ人の少年は、実は亡命者で彼の兄弟たちもフランスやノルウェーにいたということがわかり、自分の身近にそういった人がいたことが非常に驚きでした。普段の様子は本当に10代の少年ですが、いつスリ・ランカに帰るのかと訊くと、「(スリ・ランカも内戦状態が長く続いていたことから)スリ・ランカにいつ戻れるのかわからない。10年後なのか、もっと先なのか…」と、しみりとしながら言っていた彼の言葉は、今でも耳に残っています。

勉学面のみならず、こうした特殊な境遇の人との出会いは、日本ではなかなか経験できないこととであり、英国で学んだことや人との出会いは、今後私が生きていく上での大きな肥やしとなりました。私にとって貴重な経験となった英国留学を、奨学金によって支えて頂いたことは、留学中は大いに励みになりました。ここでBCJAに対し感謝の意を表するとともに、今後もBCJA奨学金受賞者としての誇りを持って仕事に励んでいく所存です。どうもありがとうございました。

(2002年度BCJA奨学生、University of Sussex、開発学)

2002年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[5]

社会経済要因と健康に関する国際共同研究

を介した日英の理解

関根 道和

私は、2002年度BCJA奨学生として、2003年5月より、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ疫学・公衆衛生学講座において疫学研究に従事しております。私の所属している講座では、疫学・公衆衛生学の領域で世界的に有名な、英国公務員を対象とした社会経済要因と健康に関する疫学研究であるホワイトホール研究を実施しております。私は日本の公務員を対象とした疫学研究を日本で実施しており、両国の公務員の社会経済要因と健康に関する国際共同研究を実施することが私の滞在目的です。

現在までに日本の公務員研究で得られた知見として、職階が高いほど健康であること、職階による健康格差は心理社会的ストレスなどの職階差によってかなり説明できること、また仕事と家庭との間の葛藤が少なく、趣味を持ち、社会活動などに積極的に参加している人は、心理社会的ストレスによる負の健康影響が少ないことなどがあげられます。このような、日本の公務員で認められる社会経済要因と健康に関する特徴は、英国の公務員でも認められており、両国における共通の健康の決定要因であ

ると考えられます。今後は、生活習慣や性格要因なども含めて、さらに詳細に検討していく予定です。そして、最終的には、両国の健康水準の維持増進のための健康政策の根拠となる医学情報を提供したいと考えております。

戦後の日本社会の特徴として、「一億総中流意識」という言葉に代表されるような経済水準、教育水準の平準化された社会であったことがあげられます。このことが日本人の長寿や健康に寄与していると考えられてきました。しかし、バブル経済崩壊以降、日本の社会経済格差が拡大傾向であることが指摘されております。英国の公務員研究の結果が示唆するところは、社会経済格差は健康格差を生む大きな要因であるということであり、今後、日本における健康格差の拡大が懸念されます。しかし、この問題は、社会経済格差の存在しない社会など存在しないというジレンマも抱えております。また社会経済格差が是正されれば健康格差が改善されるのかに対する結論も出ていません。こうした問題にどのような対処が可能なのか。これが、今後の課題であり、共同研究を通じて考察を深めたいと思います。

公衆衛生学は医学の一分野でもありますが、公衆衛生学自体は医学以上に広い学問領域を持っています。実際、私の所属する講座は医学部の一講座ですが、この英国公務員研究を支えている研究者だけでも数十名以上います。また、研究者の背景も、社会学、経済学、統計学、心理学、生物学といった多様な背景を持つ研究者で構成され、医学部出身者はむしろ少数です。様々な背景を持つ研究者が、それぞれの持ち味を生かした研究をしていることが特徴です。日本の公務員研究は、研究者総数は数名で医学部出身者が主ですから、同じ研究テーマといえども研究体制が全く異なるというよいと思います。こうした研究体制の物量の違いに圧倒されながら、より有益な研究成果を出すべく、試行錯誤の毎日が続いております。単に研究テーマの追求のみならず、日英の相互理解と交流にも微力ながら貢献したいと考えております。

最後に、前回のニュースレターでBCJA前会長の瀬川章久先生のご逝去を知り、驚きとともに誠に痛惜に耐えられません。私の渡英に際して、本年2月にBCJAからの推薦状の発行をお願いしたことが、私の先生との最後の交流となりました。お亡くなりになる直前まで、BCJA会長としての職務を全うされたことに対して深く感謝申し上げます。私に英国で学ぶ機会を与えてくださった先生に、渡英のご報告を申し上げることができないことを大変残念に思います。謹んで、哀悼の意を表すとともに、心より御冥福をお祈り申し上げます。

(2002年度BCJA奨学生、University College London、疫学・公衆衛生学)

会計報告

2003年度中間期決算報告書

2002年4月1日～2003年9月30日

収入の部

科目	金額
前年度繰越金	4,349,033
会費	16,000
雑収入	19
合計	4,365,052

支出の部

科目	金額
広告宣伝費	20,444
振込手数料	1,365
図書・通信費	75,459
合計	97,268

2003年10月31日現在の資産状況

(一般会計)

現金	0	収支過剰金	4,267,784
預金(BCJA)	2,224,530		
預金(BCJA奨学金)	2,043,254		
合計	4,267,784		4,267,784

要注意!

総会参加費等、BCJAへの振込時、ネットバンキングをご利用の会員の皆様には、次の点をご注意下さい。

振込先：ピーシージェイエー(BCJA)

これまでの振込時にご迷惑をお掛けした会員の方には、お詫び申し上げます。また、この件を早速、ご案内下さった会員の goodwill に感謝申し上げます。

(島津幸男、株式会社エムブイエヌオー、LSE 1973-74、Industrial Relations Research Fee Student Post Graduated、ys-mex@ninus.ocn.ne.jp)

BCJA ホームページのリニューアルについて

ホームページ担当

前回までのニュースレターでご案内しておりましたBCJAのホームページ <http://www.bcja.net/> について、リニューアルいたしました。ぜひ一度ご覧下さい。過去のニュースレター閲覧、BCJA英国留学奨学金、BCJA活動状況、メンバー向け案内、掲示板などがご覧になれます。今後、さらに内容を充実させていきたいと考えておりますので、どうぞ皆さまからのご意見、ご希望をお寄せいただければ幸いです。(メールアドレス m-aoyagi@aist.go.jp まで)

[編集後記]

本ニュースレター20号では、BCJA 英国留学奨学金2003年度報告、2002年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告5件、会計報告などを掲載することができました。原稿をお寄せいただいた方々に大変感謝いたします。

また、今回の編集作業から会員の田中治彦氏の夫人・田中南欧子さんにお手伝いいただき、作業を進めることができました。今後は、半年に1回発行のペースを維持できそうです。なお、本号について、当初、1月発送の予定で編集作業を進めており

ましたが、多忙のため、2月に遅れてしまいました。大変申し訳ありませんでした。

最後に、本レターをますます充実させたいと思っているところですが、そのためには、皆さまからの積極的な寄稿が不可欠です。今後ともご協力をよろしく願いいたします。なお、本レター発送については、前回に引き続き BC の國村三樹さんにご協力いただきました。この場を借りて、心より感謝いたします。

(青柳昌宏、独立行政法人 産業技術総合研究所、National Physical Laboratory 1994-95, m-aoyagi@aist.go.jp)

